GC Corporate Center

正会員　米　田　浩　二　君
正会員　杉　岡　正　敏　君
正会員　谷　口　吉　生　君

虫食い状の不整形な形状の敷地に対し、オフィスの共用部やタワーパーキングを巧みに配置し、できてみればまさにこれしかないと思わせる平面形状でまとめられている。

隣地斜線制限によって道路側のファサードは壇状のプロファイルとなっているが、全体を格子で構成し、下層階のオフィス空間と 5 階以上の上層階のゲスト空間の切り替えを、ルーバーのあるゲスト空間中央部を上から入れ子にする形で処理し、美しい比例のファサードとなっている。主要な面が北側に向いていることと、オフィスをできるだけオープンにしたいというクライアントの意向によりオフィスにはブラインドが一切設置されておらず、ルーバーのあるゲストエリアとの対比がより際立っている。ファサードの格子を構成するのは 5mm 厚のビーズブラスト仕上げのステンレスパネルであり、その質感、精度が規律を与えている。開口部のガラスはフラットバーとアルミからなるマリオンで支持され、立面的には大きなガラスと格子だけのサッシュレスな表現となっている。

実は隣地斜線制限によるプロファイルは内部空間構成にもうまく活用されている。斜線制限でセットバックした空間に、オフィス、ゲストエリアそれぞれを繋ぐオープン階段が仕込まれており、オフィスのものは必要十分な寸法で、ゲストエリアのものはゆったりとした寸法で垂直に繋がれている。ゲスト空間の階段はスカイライトから自然光が差し込む広がり感のある空間として設えられている。このことにより、全体として一体感を保ちながらも多様性のある内部空間ができあがっている。

各エリアの空間の大きさから構成エレメントに至るまで、心地よいプロポーション感覚が感じられる。高さを抑えながらも道路と平行にゆったりとした道行きを確保しながら風除室へ導く、1 階のエントランス周りの構成は、傘を開閉したりするエントランス前の機能空間を十分確保しながらも控えめな印象を与えている。

セットバックした全体のプロファイル、中央のオープンスペースと両サイドのオープン階段からなるシンプルな空間構成を実現するため、構造架構の工夫がなされている。両サイドの吹抜け空間・階段とメインのオフィス空間の境界に配置された 400mm 角のボックス独立柱は仕上材なしで、ビート処理を行った上に耐火塗料・パテしごき・仕上げ塗装のみとなっている。この柱列は、オフィスにあっては執務ゾーンとミーティングゾーンとの領域を分ける役割を果たしている。また、当然ながらこの柱の配置は立面構成とも整合しており、象徴的な存在となっている。

不要な線を消していく肌理細やかなデザイン、全体を通じての精度の良さによって、クライアントの意向にも沿った、都市の中での品格のある建築として仕上がっている。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。